

可打殺ズ、此ク諸ノ蜂ヲ具シ將來テ、必ズ怨ヲ報ズル也、

〔十訓抄〕むかし中納言和田丸と聞る人おはしけり、其末に余古大夫といふ兵者有けり、○中初瀬山のおくに籠りてけり、敵あさり求めども、深く用意して、笠置といふ山寺の岩屋の有ける中にかくれて、二三日住けるほどに、岩のもとにて、蛛といふもの、いをかけたりけるに、大なる蜂のかゝりたりけるに、いをくりかけて、まきころさんとしける時に、愍をおこして、とりてはなちて、蜂にいひけるやう、いける物は命に過たる物なし、前世の戒がすくなくて、畜生と生れたれども、心あるは命を惜む事、人にかはらず、恩を重くする事、同じかるべし、我敵にせめられて、からきめをみる、身をつみて、汝が命をたすけむ、必ずおもひしれとて、放ちやりつ、其夜の夢に、かきの水干袴きたる男のきていふやう、晝の仰悉く耳にとまりて侍る、御志實に忝し我つたなき身を受たりといへ共、いかでかその恩を報じ奉らざらん、願は我申さむまゝに構へ給へ、君の敵亡さんといふ誰人のかくはのたまふぞといへば、晝の蛛の網にからまれつる蜂は、おのれに侍ると云、あやしなから、いかにしてか敵をばうつべき、我にしたがひたりしもの、十が九は亡び失ぬ城もなし、かゝりもなし、惣じて立あふべき方もなしといへば、などかくはのたまふ残りたるものも侍らん、二三十人ばかりかまへてかたらひ集めたまへ、此うしろの山に、蜂の巢四五千ばかりあり、是もみな我に同じ物なり、語集て力をくはへ奉らん、なか打得給はざらん、但其軍したまはん日は、なよせたまひそ、本城のほどに假屋をつくりて、なりひさご壺瓶子かやうの物多く置たまへ、やうくまかりつとはんすれば、そこにかくれいらんためなり、しかしながら、其日吉ヨカらんとちぎつていぬと思ふ程に、夢さめぬ、うける事とは思ねど、いみじく哀に覺えて、夜にかくれ、故郷へ出て、此彼かくれをる者共を語て云、我生るとてかひなし、最後に一矢射てしなばやと思ふ、弓箭の道はさこそあれ、男共など云ければ、誠に可然事とて、五十人ばかり出にけり、假屋造て、あ